【郷土史への扉】

元号とイノシシ

今年は平成最後の年であり、干支が己亥（きがい・つちのとい）であることから、今号では元号とイノシシについてお話しします。

元号のいわれ

元号は世界中の国でも日本でしか使われていません。日本の歴史を知る上でも欠かせないものです。例えば南北朝時代（一三三六～一三九二年）には南朝と北朝が対立し、それぞれ別の元号を使用していました。市内には北朝の元号が刻まれている石塔が残っています。このことから当時、その石塔を建てた人物が北朝に味方していたことが分かります。

「平成」は日本の歴史上二四七番目の元号です。慶応から明治に改元される際、天皇一代につき一元号とする「一世一元（いっせいいちげん）の制」を定めました。それ以前は良いことや悪いことがあったときなど、さまざまな節目に合わせて改元していたため、天皇の代数と元号の数は合致しません。

元号の中には、「神護景雲（じんごけいうん）」という四文字の珍しいものがあります。これは女帝であった称徳（しょうとく）天皇が唐の注1則天（そくてん）武后（ぶこう）に倣ったものであるとされます。この珍しい元号が使われた時代に、干支のイノシシに関わる「宇佐八幡宮神託事件」が起きます。それは霧島市とも大きく関係しています。

イノシシと和気神社

イノシシは日本人の生活に古くから密接に関わってきた動物です。縄文時代の貝塚などから骨が出ていますし、最近はジビエ（狩猟によって得られた野生鳥獣の食肉）料理として注目されています。イノシシと関係の深い歴史上の人物といえば、平安時代の官僚・和気清麻呂（わけのきよまろ）が有名です。牧園町中津川は清麻呂が宇佐八幡宮神託事件で流された地で、清麻呂を祭っている和気神社は市民の皆さんにもよく知られた存在でしょう。

神護景雲三（七六九）年五月、皇位を狙っていた権力者・道鏡（どうきょう）が、称徳天皇に対して「（臣下である）道鏡を皇位につけよ」という宇佐八幡宮の偽（にせ）の注2託宣（たくせん）を奏上します。真偽を確かめるため遣わされた清麻呂は、宇佐八幡宮で「天皇の跡継ぎには必ず天皇家の血筋の者を立てよ。道理のない者は早く取り除け」という託宣を受け、そのまま天皇に奏上しました。これに激怒した道鏡は清麻呂を大隅国（現・鹿児島県東部）に流します。

和気神社の大絵馬（左）と和気公の銅像（京都市・護王神社）（右）

清麻呂が大隅国へ向かう途中、豊前（ぶぜん）国（現・福岡県の一部と大分県の一部）宇佐郡に至ると、三百頭あまりのイノシシが現れ宇佐八幡宮まで先導し、道鏡の刺客から守ってくれたといわれています。この翌年、称徳天皇が崩御（ほうぎょ）すると、道鏡は朝廷から追い出され、清麻呂は都へと戻されます。以上が宇佐八幡宮神託事件のてん末です。

嘉永四（一八五一）年、清麻呂は皇室を守った忠臣として神号が与えられ、神社に祭られるようになりました。一部の神社には狛犬（こまいぬ）の代わりに「狛猪」が置かれ、和気神社もその中の一つとなっています。戦前の十円紙幣には清麻呂の肖像画が採用され、裏にイノシシが描かれているものもあります。和気神社には清麻呂とイノシシを描いた大絵馬が掲げられ、珍しい白いイノシシを見ることもできます。平成最後の亥年にふさわしい、霧島市の名所ですね。

（文責＝坂）

注1：中国史上、唯一の女帝。四文字元号を使用した。
注2：神が人に乗り移ってその意志を伝えること。